ねたむほどに愛される神

ヤコブの手紙　４：５

司祭　ヨハネ 井田　泉

2024 年 9 月 22 日
聖霊降臨後第 18 主日

京都聖三一教会にて

今日の特祷の中でわたしたちは、「あなたのみ心の思いを喜んで成し遂げることができますように」と祈りました。神が願われることを喜んで行う。そのような生き方をしたいと思います。そのために今日は、使徒書の１節に耳を傾けましょう。

ところで聖書の言葉の中には、すぐわかるような言葉もあれば、これはどういう意味だろうかというものもあります。けれども、わかりにくい言葉と時間をかけて出会うことが、やがて深いところからわたしたちを生かすことになります。柔らかい食べ物だけではなく、固い食べ物もよく噛んでしっかり食べる。それが体に必要です。聖書も同じです。

今日聞いた使徒書、ヤコブの手紙の中の一節は、その固い食べ物、難解な言葉のひとつかもしれません。

「それとも、聖書に次のように書かれているのは意味がないと思うのですか。『神はわたしたちの内に住まわせた霊を、ねたむほどに深く愛しておられる。』」ヤコブ 4:5

ヤコブは聖書の引用として語っているのですが、そのようにはっきり聖書に書いてあるところは見つかりません。けれどもヤコブが神さまから聞き取った言葉としてここで語っているのですから、今日はこれに耳を傾けてみたいと思います。

実は彼がこの手紙を書いたとき、教会は危機的な状態にあり

ました。内には争いが絶えず、富や地位を求めるこの世的な考えが支配している。貧しい人は隅っこに追いやられている。一言で言って、神さまを忘れた状態に陥っていました。その大きな間違いを示して、教会と人々の信仰を立て直したい。それがヤコブの切なる願いでした。

「神はわたしたちの内に住まわせた霊を、ねたむほどに深く愛しておられる。」

「神はわたしたちの内に住まわせた」

神さまがわたしたちの内に何かを住まわせた、宿らせた、というのです。神さまから来る何か大切な尊いもの。それがわたしたちの内に、わたしの内に住んでいる。わたしたちのうちに生きて存在している。それは何か、というと**「霊」**です。

神が、ご自身の大切な霊を、わたしたちの中に送り、わたしたちの内に住まわせた。わたしたちの内には、神さまからいただいた霊が、言い換えると命の息吹が、神の光が、神の愛の火が宿っている。

そのように感じてみましょう。聖書を読む時、頭で理解するだけではなく、想像して、感じてみることが大切です。

皆さんの中に、わたしの中に、神さまから吹き込まれた息吹がある。最初の人間の創造のとき、神は命の息をその人に吹き

込まれました。わたしの中にもそれが吹き込まれています。わたしの中に起こる深い呼吸が神さまと通じています。

わたしの中に、神さまから照らされて宿った光がある。その光がわたしの内側で輝くなら、希望をもって前に向かって生きていけます。

わたしの中に、神さまからいただいた愛の火、情熱の火がある。この火はわたしの内で燃えて、神さまを愛させる。神さまと人のために何かしたい、という思いを起こします。

神さまから来た息吹と光と火が、わたしの中に宿っている。これが、わたしたちの内に神が住まわせたと言われる「霊」です。そのわたしの中の霊を神が愛しておられる。深く愛しておられる。これは、神がわたしを、わたしの一番深い奥底まで愛しておられる、というのと同じ意味です。

ところがわたしたちは時々、神が住まわせた霊の思いとは正反対のことを思い、逆の方向の行動をしてしまうことがあります。今日の福音書の中の弟子たちがそうでした。

イエスは、弟子たちが何か話していたことが気になった。そこで尋ねられました。「途中で何を議論していたのか」（マルコ9:33）。弟子たちは負い目を感じて沈黙します。弟子たちは自分

たちの中で「だれがいちばん偉いか」と議論していたのです。優劣、上下に関心を向けている。しかしそのようなことはイエスの目的や願いにまったく反するものでした。イエスは近くにいた幼子を抱き上げて、彼らが自分たちの間違いに気づくようにされました。

優劣の意識、高慢、利己心、支配欲、自己保身……。こうしたものから解放されてほしい。それがイエスの願いです。

もし、神がわたしたちの内に送り宿らせてくださった呼吸が弱り、光が失せ、愛の火が消えそうになってしまっていたら、神は平気でおられるでしょうか。

「神はわたしたちの内に住まわせた霊を、ねたむほどに深く愛しておられる。」

ご自分の愛する者たちが、ご自分の大切な教会が、与えておいたあの息も光も愛の火も忘れて、自分から離れ去っている。そうすると非常に人間的な言い方なのですが、神はねたみを起こされる、というのです。

あなたを心から愛するがゆえに、わたしは霊をあなたの内に住まわせた。わたしが与えた息吹は、光は、愛の火は、あなたの内に住まわせた霊はどうなったのか。あなたはいつの間にか、

この世のものにすっかり心を奪われ、わたしが与えたのとは違う別の息、別の光、別の火を求めているのではないか。

神さまにとってわたしたちはどうでもよいものではなく、大切なもの。切実な愛の対象です。神がわたしの内に住まわせてくださった霊は、神さまの分身です。神よりもこの世のほうに心を奪われてしまっているわたしたちを、神はねたましく思われる。神さまはわたしたちを 100 パーセント愛し、ご自分のものとしたい。中途半端ではなく、もう一度、神はわたしたちを完全に捕らえたい。そしてわたしたちがまっすぐに神さまのほうを向いて、託された霊を大切にして、それを中心にして生きてほしい。

「神はわたしたちの内に住まわせた霊を、ねたむほどに深く愛しておられる。」

「妬むほどに」。この異様とも思える言葉の中に、わたしたちを限りなく愛される神の愛の火が激しく燃えています。神はかつて、この手紙の読者の信仰と生活を再建しようとされました。かつてそうであったように、今もそうなのです。

神はわたしたちを求めておられます。神がわたしたちの内に住まわせた霊がわたしたちの内で生きるように。わたしたちの内にあるはずの神からの息吹が再び起こるように。神からの光

がわたしたちの内にあって輝くように。神の愛の情熱の火がわたしたちの内で燃えるように。それを神は切に願っておられます。

祈ります。

神さま、あなたはわたしたちの内にあなたの霊を住まわせてくださいました。それなのにわたしたちがそれを忘れて粗末にしてきたことを懺悔いたします。あなたの愛の火がわたしの内に燃える、そのようなわたしたちにしてください。あなたの愛の霊が生きて働く教会にしてください。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン